

大東文化歴史資料館だより

第11号 2011. 11. 30

歴史資料館へ資料の寄贈を！

大東文化歴史資料館運営委員 東京大学・桜美林大学名誉教授 寺崎 昌男

大学アーカイブス関係者は、みな必死の思いで学内・学外の資料を収集している。だが収集資料だけでなく、それと並んで、寄贈資料がなければ、アーカイブスの使命を果たすことはできない。大東文化歴史資料館にとっても事情は同じである。

授業料督促状のこと

東京大学百年史を編集していたころのことである。

「大正時代に卒業した祖父が授業料を納めていなかったと見えて、督促を受けたようです。手紙が残っているんですけど・・・」と電話がかかってきた。「ぜひ頂きたい。すぐ伺います」と答えて、北関東のある町を訪ねた。

拝見すると、たしかに催促状だが、ハガキ一枚のものではない。「前略云々」に始まる丁寧な書状で、付録の文書まで付いている。その文書には当年度の学部毎の授業料額一覧も何十何円の単位まで載っている。同じ大学でも学部毎に学費が違ったことがよく分かる。他の刊本や法令からはなかなか掴めない情報である。貴重な資料として沿革史の中に活用することができた。

「危険な情報」も

国立大学に勤務していた知人から聞いた別の話もある。

元・事務局長が物故し、遺族から「行李2杯分の資料が残されている。大学関係のもののようなから寄贈したい」という連絡があった。早速出向くと、確かに貴重な文書ばかりで、もちろん譲り受けることにした。

持ち帰った文書を整理すると、故人の手帳が数冊あった。めくってみると、昭和40年代のある日のページにメモがある。学長・事務局長及び首脳部が開いた小会議の要点である。それは、ある部局を廃止してはどうかという、内密の会議のメモであった。しかも廃止されようとしていた部局は、他にもない調査に行った友人自身が属する組織のことだった。

知人も廃止の噂だけは聞いていたが「わが部局は本当に潰されそうになっていたのだ」と改めてはっきり知ることができた。廃止政策の発議者の一人による「この上ない記録資料」が手に入ったわけである。

「ご遺族にお礼しながら、もしこれが実現していたら・・・と震えたね」と知人は述懐していた。

「恐怖の記録」とはいえ、こういう根拠があれば、沿革史の中の部局動向に自信を持って記述することができる。失礼な予想ながら、もし記録者本人がお元気だったらとてもアーカイブスの手には入らなかったろう。「寄贈」がもたらした新知見である。

創設者の学位論文

寄贈を受けるというのは、一見、受身の行動に見える。だがその成果は、駆け回って資料集めをするのにまさる場合がある。

最近報告された成果の一つは、東洋大学の例である。開祖井上円了が日清戦争直後に帝国大学（後の東京帝国大学）へ提出した博士学位論文の下書きが、遺家族から寄贈されたという。

雑誌に掲載された写真版で見ると、下書きとはいえ見事な墨筆の浄書論文で、本人が加えた朱筆修正部分もはっきり分かる。いつ文科大学に提出され、どのように審査され、いつ文部省に廻ったかなどもすべて確かめられている（三浦節夫「井上円了の博士学位論文『仏教哲学系統論』について」、東洋大学井上円了記念学術センター『井上センター年報』第20巻、2011年9月刊）。

この論文は審査通過後遂に公刊されなかった。しかし今回、1世紀以上埋もれていた全貌が世に出た。

ちなみに、上の論文の完成経緯や審査経過がはっきりと分かるのは、東京大学の行政文書が大学史史料室を通じて公開されているからである。しかし何と言っても決定的なきっかけは、ご遺族が下書きを保存しておられていたこと、そしてそれをアーカイブス（東洋大学の場合は井上円了記念学術センター）に寄贈されたことである。

むすび

大東の校友の方々、大学や高校等の教職員・関係の方々、さらにそれらのご遺族の方々に特にお願いしたい。学園に関係ありと思われる資料があったら、分量にかかわらず、ぜひ歴史資料館にご一報を。それは日本の文化史・教育史に新世界を開いてくれるかも知れないのである。

<資料寄贈ご協力をお願い>

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。